



株式会社 幸和義肢研究所

代表取締役 横張 和壽氏

■企業概要

本社：つくば市大白谿341-1
 創業：昭和40年
 設立：昭和58年3月
 従業員：63名
 事業内容：義手・義足・装具の製造及び販売
 車いす・介護用品・リハビリ機器・補聴器等の販売
 福祉用具レンタル・住宅改修

つくば市に本社を置く株式会社幸和義肢研究所は、昭和40年に「横張装具製作所」として創業、昭和58年に法人化して以来、高齢者や障がい者の方の義肢装具の製作、車椅子や補聴器などの福祉機器の製造販売などを行っています。

同社は義肢が「身体の一部」であり、人によって身体の形や成長度合、日常生活動作が異なるため、1人ひとりの希望に応じたオーダーメイド型で義肢を製作しています。

義肢製作は「0.01mmの世界」を手作業で勝負する世界であり、同社の義肢装具士は日々技術力の向上に余念がありません。

ものづくりの先にある「ユーザーの豊かな暮らし」を見据えながら成長し続ける同社の取り組みを取材しました。

(インタビュー日：平成29年3月8日)

〔聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一〕

ご自身の略歴と御社創業のきっかけについてお聞かせください。

■ 独学で義肢修理に挑戦

私は旧水海道市（現常総市）の出身です。私の父濱一は、大正10年に市内でハサミや注射器などの医療機器を販売する「横張医療機器」を創業

し、砂利道を自転車で走りながら県内外の病院に対して訪問販売事業を展開していました。

20歳の頃、父の手伝いで病院を訪問すると、義手や義足の修理を相談されるようになりました。

当時、県内に義肢修理の専門店はなく、当然私にも修理技術はありませんでした。そのため材料仕入業者から譲り受けた見本だけを頼りに、自宅にあったマイナスドライバーと金づちを使ってコルセットや義肢を独学で製作していきました。

しかし、私は医学を学んだ人間ではないので専門用語も分らず、ある病院では、「こんなお粗末な製品では話にならない。もう来ないでほしい。」と言われ悔しい想いもしました。

■ 恩師との出会いで道が開く

私は27歳の時、義肢装具の専門的な知識と技術を学ぶことができる場所として、昭和46年に設立した「東京都補装具研究所」の存在を知り、薫にもすぎる思いで入所希望の手紙を送りました。

すると、所長の加倉井先生が茨城県の出身だったというご縁もあり、1年間、毎週水曜日に製作の修行許可を頂くことができました。

加倉井先生は、医学的な見地と技術で義肢装具を作り上げる天才でした。私は難しい場所から足を切断した方が、先生の義肢で歩けるようになるという奇跡を何度も目の当たりにしました。ここでの学びは、私の一生の糧となっています。

御社の事業概要と高い技術力を支えるものについてお聞かせください。

■「オーダーメイド義肢」が暮らしを豊かに

修業を重ね確かな技術を習得した私は、昭和40年に「横張装具製作所」を創業し、昭和58年に法人化しました。

当社の事業内容は、高齢者や障がい者の方の義肢装具の製作、車椅子や補聴器などの福祉機器の製造販売などです。

義肢を製作する義肢装具士は、義肢に応じて型取りを行い、1週間後に仮合わせしながら角度や位置などの調整を重ね、計2週間で完成するようなスケジュールで製作しています。

義肢は「身体の一部」であり、人によって身体の形や成長度合、日常生活動作が異なります。そのため当社では、1人ひとりのご希望に応じたオーダーメイド型で義肢を製作しています。

■ユーザーの人生を変える義肢作り

当社の義肢をご利用になっている方は、赤ちゃんをはじめ、何度も義足を作ってきたが全く合わず長年辛い思いしてきた方、アスリート選手など様々です。

現在、国内だけでなく海外からのお客様も増え、年間2万人を超える方が当社を訪れています。当社は一切営業活動をしていないため、ユーザーの口コミなどから評判が広がっています。

当社の義肢を装着した方からは「ディズニーランドで1日中遊ぶことができ、人生が180度変わった」など多くの喜びの声が届いています。



赤ちゃん用の義足について説明する横張社長

■厚生労働大臣賞を受賞した高い技術力

当社の工場長である石川芳伸は、自身も義足ユーザーであり、まさに「お客様の気持ち」が分かる義肢装具士の1人です。

工場長は、全国障害者技能競技大会で厚生労働大臣賞を受賞しており、高い技術力を持って技術部門を牽引しています。



石川工場長が作業する様子

高い技術を持つ者ほど「ユーザーが満足できる義肢を作ることができたのは偶然です。本当にラッキーでした。」と謙虚に語ります。これほど義肢製作は難しい作業なのです。

義肢に使う膝のパーツだけで100種類もあり、どれを選べばユーザーに快適さを提供できるかは、技術者の知識と経験だけが頼りです。

お客様の中には、今までたくさんの義肢を作ってきたが一度も自分の身体に合わず、義肢製作業者に対して懐疑的になっている方もいます。

当社ではお客様と真摯に向き合い、何度も調整を重ね、納得いくまで製作していくことで、満足度の高い義肢を作り上げています。

■「福祉の心」が技術者の手を動かす

年々、社員の仕事量は増え続けていますが、社員は文句ひとつ言わず「福祉の心」と「ホスピタリティ精神」を持って自発的に仕事に取り組んでいます。

それは、休暇中の社員がホテルで見知らぬ方の故障した車椅子を好意で修理し、後日ホテルを通して修理した方から感謝されたというエピソードからも垣間見ることができます。

■「0.01mmの世界」を手作業で勝負する

私は自分を「商売人」ではなく、「ものづくりの技術者」と捉えています。なぜなら、私が当社の事業を金儲けの商売と位置付け、ノルマなどを課した途端、社員とお客様の両方を不幸にしてしまうと考えているからです。そのため、当社は売上方針を定めず、営業活動も一切行いません。

義肢製作は「0.01mmの世界」を手作業で勝負しています。機械生産と比べれば時間と労力がかかり、決して効率的とはいえません。

しかし、ユーザーの豊かな人生を支える義肢を作り上げるためには、各技術者が時間も労力も惜しまず、ベストを尽くすことが最も大切なのです。



幸和義肢研究所では、様々な種類の義肢を揃えている。
左手前は、義足の素晴らしさを語る石川工場長。

■ 技術を伝える高いコミュニケーション力

当社の社員は、使用する素材や製作方法に頭を悩ませながら日々過ごしています。より良い義肢を作るため、時に社員が考え出した特注設備を社内に設置することもあります。

また、当社の社員はみなコミュニケーション能力が高いのも特徴です。社内で様々な発表会を開催し、社員自らが「伝える力」を鍛えています。高い技術があっても、それを伝える能力が無ければ意味が無いのです。

社員の「人を思いやる気持ち」が技術力とコミュニケーション力を向上させ、「真剣に向き合う気持ち」がお客様の信頼につながっています。そしてその先に、お客様が豊かな人生を送るための最高の義肢が生み出されていくのです。

事業の転機と事業拡大プロセスについてお聞かせください。

■ 社員の一言が将来を考えるきっかけに

約10年前、社員から「会社の将来ビジョンについてどのように考えているのですか？」と質問を投げかけられました。当時の私は正月三が日のみ身体を休められるという生活で、正直、将来についてゆっくり考える余裕はありませんでした。

その後、私は体調を崩し、入院という名の“休暇”を取らざるを得なくなりました。しかし、この期間に様々な想いを巡らせ、ひらめいたことがあります。

「最新の福祉機器を展示し、試乗もできる、広さ3,000㎡の『医療福祉モール』を建設しよう」

私は一気に活力が湧き上がり、私に質問を投げかけてくれた社員に深く感謝しました。

■ 業界初となる福祉機器の展示販売

私の構想は、平成23年に新社屋「医療福祉モール」として実現しました。バリアフリーにこだわった建物には、工場をはじめ待合室や福祉機器を見て触れて、さらに試乗もできる展示室などを設置しました。

当社の取り組みは業界で初めて試みのとなり、現在では国内外の企業から新商品の展示依頼が絶えず、お客様にも大変ご満足を頂いています。

展示室の説明は社員が担当します。車椅子など実際に福祉機器を使用している社員が説明することで、お客様により親身なご説明ができていますと自負しています。



様々な車椅子が並び展示室で、実際に車椅子を使用する社員が各車椅子の特徴を丁寧に説明する

■ ものづくりの先にある「就労支援」

私たちは、ものづくりの先にある「ユーザーの豊かな暮らし」を見据えています。平成28年の秋、当社はこの想いをより確かなものにするため、敷地内に新たな2つの拠点を創設しました。

1つは、障がいがある方の就労支援施設「ワーク・イノベーションセンター(WIC)」です。ここでは義肢装具のパーツ作りPC作業などを行っています。

2つ目は、屋外に種類の違う砂利やグレーチング、坂道や段差など様々な路面状況を再現した「つくばイノベーションパーク(TIP)」です。この施設は、実際に生活するイメージを持ちながら、車椅子などの練習や試乗をすることができるスペースとなっています。



ワーク・イノベーションセンター(図上)
つくばイノベーションパーク(図右下)
(提供：幸和義肢研究所)

今後の事業戦略についてお聞かせください。

■ 世界に求められる企業を目指して

今後の展開として、国内の同業社と連携した人材交流を行い、技術力の向上と業界の底上げを図っていきたくと考えています。

また、当社の事業は、国内だけでなく海外からも期待されており、今年は世界で約30%のシェアを誇るフランスのある企業から招待を受け、視察に行く予定となっています。

私は、当社が世界中の企業とのネットワークを広げていくことで、日本の福祉マーケットをさらに活性化させる存在になっていきたくと考えています。

今後は世界レベルの高い技術を習得していきながら、さらなる事業を展開し続け、世界中から求められる企業を目指して参ります。



TIP内で踏切を再現することで、利用者は車椅子の車輪がどのようにはまってしまうか確認できる

最後に社員に対する想いをお聞かせください。

■ 社員の成長こそ、当社の活力

当社は社員の成長で支えられています。“怒り”で人は動きません。私は“心”で大切なことを伝えていきたいと考えています。

私は本を開く時、いつも社員に贈るメッセージを探しながら読んでいます。例えば、若い社員に対して「30代は黄金時代。一生は短い。常に自分を変える努力をしてほしい。」と伝えています。

「社員が豊かになることで会社も豊かになり、結果としてお客様も幸せになる」—この循環こそが、新たなステージへ向かう当社の活力の源になっているのです。



横張社長(中央右)、横張副社長(中央左)、
つくば営業部 武藤部長(左)と聞き手・藤咲耕一

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

■ 文責・写真：筑波総研株式会社 研究員 富山かなえ